京都精華大学

kyoto seika university 2011

上の電車はフィクションです。
でも、京都精華大学の隣にはほんとうに
叡山電鉄（略してえいでん）の
「京都精華大前駅」があります。

さあ、自由と表現の旅に出かけよう。

京都精華大学は、“自由と表現の大学”です。
それは、キャンパスや、授業や、学生たちの日々を見れば、きっとよくわかるはず。
精華を、もっと深く知るために。これより、誌上ツアーのはじまりです！

表現が表現を呼ぶ、キャンパス。

叡山電鉄「京都精華大前」駅を降りて、虹のようなかたちの橋を渡ると、そこはもう精華大のキャンパス。時間はちょうど昼休み、食堂前は学生たちであふれていた。水上ステージ上では学生たちが民族楽器を演奏し、かと思えば、鐘の音を鳴らす阿波踊りの行列が通り過ぎる。ビデオカメラを回して撮影しているグループや、コンロでお茶を沸かし、ピクニックさながらに読書会を開いている人たち。休憩時間とはいえ、ちょっとにぎやか過ぎる。立体作品を運んでいる学生に「きょうは何かイベントがある日なの?」とたずねると、「え、いつもこんな感じですよー」との返答が。彼らは食堂前のスペースを使って開くグループ展の準備中らしい。

壁にはおびただしい数のポスターが貼ってある。手描きのユルすぎるチラシから、グラフィック全開の気合の入ったフライヤーまで、デザインはさまざま。ほとんどが学生主催のイベント告知だ。さらに山の斜面に並べられたカラフルなトーテムポールや、木の上に置かれたいろんなかたちの鳥かご、草むらに佇む巨大なモアイ像など、謎の作品がキャンパスのあちこちに……。学生たちの過ごし方も、昼寝中の猫に忍び足で近づきカメラを構える人もいれば、静かにもくもくとデッサンにはげむ人も、校舎の階段に座り込んでディスカッションしている人たちもいる。

いろんな色、いろんな音、いろんな人。自分とは何者なのかを伝えるため、手を動かし、言葉を紡ぐ。この場所には、何かをつくり出そうとするエネルギーが満ちあふれている。「で、あなたは何を表現する?」。精華は、そんなふうに一人ひとりに問いかけてくるキャンパスなのだ。

「あなたにとって自由ってなんですか?」

自由自治。京都精華大学は創立当初から、この言葉を理念に掲げてきた。でも、これがなかなか難しい。あなたにとって自由とは。大学での自治とは。ためしに学内でアンケートを取ってみたが、答えはご覧のようにバラバラだ。いや、そのバラバラさこそが自由の証しともいえるのだけれど……。

その理念は、リベラルな法学者だった初代学長、岡本清一が遺したいくつかの文章に刻まれている。

「学内における学生の自由と自治は尊重され、その精神の涵養がはかられる。従って学生は、学内の秩序と環境の整頓に対して責任を負わなければならない」(1967年、教育の基本方針に関する覚書)

「教師も学生もすべて、まず人間として尊重され、自由と自治の精神の波打つ新しい大学を、これから創造していこうとしているのである」(1968年、入学案内)

これを読むと、精華は「自由自治」を実現するためにつくられた大学だといってもいい。だから、校門もなければ塀もない。校章や校歌もない。芸術系の学部では、何よりも自由な表現が重んじられ、人文学部には、テーマも研究方法も学生にゆだねられるプログラムがある。でも、考えてみてほしい。しばりがないなかで、自分がつくりたいものをつくり、ここで何をなすべきかを見つけるのは、かなりキツいことだ。

それゆえ、たくさんの議論と試行錯誤を重ねてきた。施設の利用に関して異論が出たこともあったし、学園祭のあり方をめぐる問題もあった。「自由自治」の石碑を学内に建てるときには、「理念の押しつけは、ほんとうの自由ではない」という声も出た。みんなが自由であろうとすると、当然意見のぶつかり合いが出てくるし、相手を説得したり、理解することも必要になる。自由自治とはなんと面倒で、時間のかかるものなんだろう。

精華の第1期卒業生の赤坂博理事長が、考えるヒントをくれた。それは、やはり初代学長の「大学は学問と教育と深い友情を発見する場所である」という言葉のなかにある、と。「大学とは、学生と教員と職員、それに卒業生や地域の人たちも含めた“共同体”なんです。そこに参加する者は、共同体が自由であるために自分に何ができるか、考えつづけてほしい」と赤坂さん。

精華という小さな共同体のなかで、みんな「自由自治」の問題にぶつかり、悩み、自分なりの答えを探しつづけている。だからこそ、精華はずっと「自由自治」の大学でありつづけているのだ。

精華の建学の理念は
→P210〜

一緒にカレーライス、という関係。

精華の学生は教員のことを「先生」ではなく、「○○さん」と名前で呼ぶことが多い。学長なら「島本さん」。食堂で昼食をとっていると、学生たちが「あ、島本さん、きょうもカレーですね」と、隣の席に着く。談笑交じりのランチタイム。なごやかな光景が、学生と教員の「近さ」を物語る。

原点は創立時にある。初代学長の岡本清一は1968年度の入学案内にこう書いた。

「学生の精神を凍りつかせるような官僚主義的な環境の大学では、友情を培うことはできない。学生を群集のなかの一人としてしか扱うことのできない巨大大学においては、学生の孤独からの脱出はきわめて困難である」

この思いが精華の教育方針のひとつ、「人格平等主義」になった。「さん」付けは、これに共鳴した学生や教員が自然発生的にはじめたらしい。当時を知る職員がこんな話をしていた。「教員の多くは20～30代と若く、学生にとって兄のような存在でした。夜遅くまで車座で議論したり、ときには一緒にデモに出かけたり……」。それはいまも変わらない。学生が自由に研究室に出入りし、教員とお茶を飲んでいたりする。

肩書きや立場より、まず人間として尊重する。それが精華流なのだ。

精華の建学の理念は
→P210～

シカもいる大学生活。

精華のキャンパスを散歩していると、さまざまな動物に遭遇する。水上ステージ横ではクジャクが優雅に羽を広げ、日本画コースがある5号館裏ではツルとバリケンがクワクワと大合唱。その隣にはウサギやキジ、軍鶏がのんびりと暮らしている。そんななかでも学生にいちばん人気なのが、シカ。学内の森の一角に設けられている鹿野苑には、立派な角が自慢の牡鹿をはじめとする7頭が生活。春には生まれたての愛らしいバンビを見ることもできる。シカたちの凛々しい姿を写生する学生や、静かに草をはむ姿を眺めながら木製ベンチでまったりトークをする学生、なかには「ここで同窓会を開いた」という卒業生もいるほど。シカも一緒の大学生活、あなたならどう過ごす？

施設と環境については
→P203～

京都精華大学 完全ガイド2011

kyoto seika university complete guide 2011

マンガ学部 135

芸術学部 67

デザイン学部 101

人文学部 159

学部共通プログラム 187

学生生活 199

進路・就職 193

施設と沿革 203

芸術学部

造形学科

洋画
日本画
立体造形

素材表現学科

陶芸
テキスタイル

メディア造形学科

版画
映像

デザイン学部

ビジュアルデザイン学科

グラフィックデザイン
イラストレーション
デジタルクリエイション

プロダクトデザイン学科

プロダクトコミュニケーション
ライフクリエイション

建築学科

建築

マンガ学部

マンガ学科

カートゥーン
ストーリーマンガ

アニメーション学科

アニメーション

マンガプロデュース学科

マンガプロデュース

人文学部

総合人文学科

現代文化表現
国際コミュニケーション
日本・アジア文化
環境未来
現代社会と人間

大学院

芸術研究科
デザイン研究科
マンガ研究科
人文学研究科